

10年間、おおぜいの人の支えにより、三度の選挙を戦い抜いた末の青年県議の誕生。

手造り選挙の勝利を、みんなと涙で分かち合った、**41歳の榎本与助**・・・

しかし、若い政治家、榎本与助のこれまでの**あゆみ**は、必ずしも平坦ではない。

敗戦直後の昭和20年10月17日、津久井郡相模湖町与瀬で産声をあげた。

3才の時、トラックの運転手であった父憲吉の仕事の都合で相模原に移転。

その後、裕福とは、ほど遠い家であったが、3歳年上の姉と共に両親の愛情に育まれながら、昭和27年小学校に入学。・・・しかし、この頃から**母時**の身体は病魔に侵されはじめ、病がちな日々が続いた。

そして昭和29年、初夏を迎えた途端に、父と中学1年の姉、それに小学校3年で8歳の与助少年に別れを惜しみながらであろう、母時はこの世を去った。・・・まさに無情という他はない。

それでも少年は、近所のおばさんやおじさん、友達にも恵まれ、明るく育ち昭和33年中学に入学。

中学時代の3年間は、スポーツと家計を助けるためのアルバイトに明け暮れた。朝は牛乳配達、夏休みは毎日「朝・昼・夕」と3回、ラッパを吹きながら豆腐を売って廻った。冬休みもアルバイトに精を出した。

特に、中学1年の夏休みに始めた「豆腐売り」は、いまでも思い出が深いという。

そしてこの「豆腐売り」を通して、与助少年は人の情けを強く知った。

まだ、大人用自転車のペダルに足が十分届かない時分である。雨の日などは砂利道にハンドルをとられ、転んで豆腐をぶちまけることもあった。グチャグチャになった「豆腐」はどうにもならず、涙ながらに困惑している与助少年の姿を見て、近所のおばさんが壊れて「泥んこな豆腐」を全部買ってくれた。

当時、豆腐1丁15円、各家庭では、1円・2円を丹念に家計簿に付けていた頃のことである。

人の情け、「これがある以上、いかなる逆境に立っても決してくじけちゃいけない」と、これまでも辛い時、苦しい時などは、いつも少年の頃を思い浮かべ、自分自身を奮い立たせた。

昭和36年、中学を卒業と同時に就職、社会人としての第一歩を踏み出した。

その後、十指に余るほど職を替え、昭和42年4月、海上自衛隊を除隊し、東京へ。

この時、榎本青年21歳、都立新宿高校定時制の生徒として、新たなスタート台に。

この高校生活も牛乳配達を唯一の収入源として頑張った。青雲の志しを抱いての出発とはいえ、先行きは海とも山とも覚束ない極めて不安定な時期であった。

その後、次第に政治活動に足を踏み入れ、昭和47年、26歳で専修大学に進むが中退をするまでの3年間、その殆どを政治活動に費やした。

この時期、深夜ふと、年老いたおやじのことや自分の将来に思いを馳せる時、如何に天下国家を論じようとも、そこはかたない不安に陥ることもたびたびであったという。

また、「心に刻んだ人の恩に報いる」ためにも、「必ず政治を志す」と、心密かに誓っても、『じばん・かんぱん・かばん』が政治家への必要条件といわれた時代である。徒手空拳、何も無い身では、むなしさが募るばかりであった。・・・長いこと男手ひとつで苦勞して来た「おやじ」のもとへ帰り、親孝行の真似事でもしなければ・・・繰り返し、繰り返し考え悩んだという。

昭和49年9月、悩みながらも謳歌^{おうか}した学生生活にピリオドを打ち、政治活動に向けての準備に取り掛かる。
昭和50年8月、衆議院へ出馬準備をしていた戸沢政方先生の秘書として、生まれ故郷の津久井郡を舞台に、本格的な政治活動を展開することになる。

その後、昭和54年と58年の二度にわたり津久井郡から県議選に出馬するが、いずれも苦杯。
相模湖町が榎本の生れ故郷とはいえ、おやじは山形県、おふくろは岐阜県であり、言わばよそ者である。

それでも昭和59年3月、戸沢政方先生の理解と多くの方々による物心両面の援助により、事務所を構え、三度目の挑戦に向けた準備に取り掛かる。

特筆すべきは、当選するまでの3年間、生活費と活動費の全てが、支援者の尊い浄財(献金)であった。
県議選に挑む者として、当時の時代背景では、実に異例なことであった。

そして昭和62年4月、数々の思いを胸に秘め、後のない三度目の県議選に挑戦。
大勢の支援を一身に受けての激戦の結果、大方の下馬評を覆^{くつがえ}して劇的な勝利。

・・・ただ、この1ヶ月半ほど前に、父憲吉は83歳で母のもとへ逝^いっていた。
おそらく、幼い頃の娘(千代子)と息子(与助)をふびんに思いながらも、黙黙^{もくもく}と生活に取り組んで来た親父。
1坪の財産も蓄^{たくわ}えることのできなかった親父。真正直で無口、人の良過ぎた親父。・・・
目に付くものは何も残せなかった親父だけれど、自らの全てを息子の勝利のために捧げてくれたのではと、榎本青年には思えた。
《昭和62年(1987年)4月 初当選のあと》

～わたしの母～

小学校時代の春・秋の遠足には、必ず付き添ってくれた母。
しかし3年生の春、高尾山への遠足を最後に、その後、夏を待っていたかのように逝ってしまった。まさに無情という他はない。親父と中学1年の姉、8才の私に別れを惜しみながらであったと思う。
したがって、母が私を叱ったり、励ましたり、たまにはホメたりする時に、「ヨシ(与助)」と呼ぶ声を聞いたのは、この世に生を受けてから、ほんのわずかな期間でしかなかった。

私の記憶だと、母は私が小学校に入学した頃から、正確にはそれ以前かもしれないが病魔に侵されていた。子供なりに病気を気遣ってか、もの心のついたあと、母のふところで休んだ覚えはない。

鮮明に覚えているが、大正初期生まれの母は、気丈夫で怖い存在だった。
台所で遠いつくばりながら、朝飯のしたくをしている姿を何度も見た。
時には嘔吐しながらであった。

昭和29年6月6日夕暮れ、外は雨、病院のベットで最後の力を振り絞るように、私に言った。

「父ちゃんと姉ちゃんに、心配かけないで仲良くするんだよ。

自分のことはちゃんとするんだよ、頑張るんだよ。」

私にとって、この時の母の言葉が、いまでも、何よりの教訓である。